



武蔵高等学校時代の戸田盛和
戸田は1934年に武蔵高等学校尋常科を、1937年に同高等科を卒業した。写真は本を読みながら弁当を食べているところ。



ファインマンと戸田夫妻(1955年)
アメリカの物理学者ファインマンは1953年に初めて来日したが、2度目の来日(1955年)の際には戸田が各地を案内し、自宅にも招いた。兄の戸田邦雄(盛国)も歓迎の宴に加わった。



朝永振一郎と戸田盛和(1975年)
二人は東京文理科大学(東京教育大学)で同僚であり、親しかった。写真は三菱鉛筆を見学した際のもの。朝永はこの10年前にノーベル物理学賞を受賞している。

戸田盛和(1917-2010)は、戦後の日本を代表する物理学者の一人です。戸田の関心は多くの方面に及んでいますが、物理学上の主要な業績は、「戸田格子」と言われる、非線形格子力学におけるモデルの発見と、そこに生ずる孤立した波、いわゆるソリトンの研究です。この業績は国際的にも高く評価されました。

今日多くの方が戸田の名前を目にするのは、その大量の著作によってでしょう。戸田は、学者を「本書く派」とそうでない者に分け、自分を前者に分類していました。著作の種類も多岐にわたり、専門の研究を解説したものから、小学校から大学院段階にまで及ぶ物理学・理科の教科書・参考書、物理学に題材をとった随筆などを世に送り出しています。

戸田はまた、物理学の原理を巧みに用いたおもちゃにも強い関心を寄せていました。初めはおもちゃの原理を解説しながらこれを教材として使うことに意味を見出していたようですが、次第に、世界各地にある多種多様なおもちゃを集めること自体を楽しむようになりました。戸田の著作の中にはおもちゃを主題にしたものも数多くあり、一群を成すに至っています。

さらに、戸田の著作には、他の著者のものにはあまりない大きな特徴があります。それは、著者自身による挿絵が多いという点です。戸田が本格的に絵を習うようになるのは、常勤の職を退いて時間の

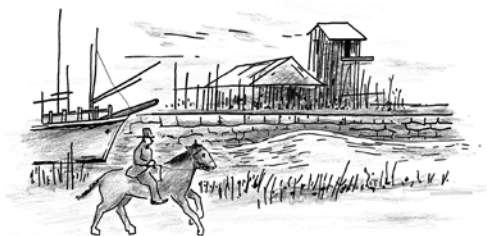
余裕ができてからですが、そのはるか以前から、自身の著作、とくに物理やおもちゃの解説書、あるいは気軽な読み物の中で、自分の絵を挿画として使っていました。「本書く派」を「本描く派」とそうでないものに分ければ、前者はごく少数になるでしょうが、戸田はその代表格だったと言ってよいでしょう。

本年2017年は、戸田盛和生誕100周年に当たるとともに、1966年に発見され、翌年に広く世界に知られるに至った戸田格子の誕生50周年でもあります。本展に先駆けて、当館では、「本書く派戸田盛和」(2016年9月10日～10月2日)、「おもちゃと波と金平糖—戸田盛和生誕100周年」(2017年3月6日～4月14日)を開催し、戸田の事績を振り返ってきましたが、本展ではそれらを組み合わせて若干の修正を加え、物理学研究においても、おもちゃ蒐集においても、作家としても、挿画家としても、一流であり多産であった戸田の事績を振り返ります。展示の企画・制作には、本学大学院総合文化研究科で科学史を専攻する大学院生と、東京大学教養学部基礎科学科・学際科学科・教養学科の学生(当時)が当たりました。

本展の開催にあたりご協力を賜りました皆様に感謝申し上げます。

物理もおもちゃも本描く派 戸田盛和 生誕100周年

書齋でおもちゃを見せる戸田盛和(1983年) 学研の雑誌『TUTAN』のために撮影したもの。書棚のあちこちにおもちゃが並べられている。



孤立波の発見(1980年頃)
孤立した波(ソリトン)の研究の端緒であるスコット・ラッセルによる孤立波の発見の逸話を描いたもの。戸田はこの題材を好んで挿絵に用いた。



『動くおもちゃ』(1983年)の平和鳥の挿絵の原図
平和鳥(水呑み鳥)は戸田が好んだおもちゃの一つ。戸田はこうした絵を楽しんで描き、自身の著作の挿絵に用いた。

